

こんにちは！ 室長の工藤です。

先月の歴史講座「あおもり歴史トリビアを読む会」は、「浅虫の製塩と米田甚吉」というテーマでお話をしました。米田は国内では珍しい温泉熱を使った製塩事業を明治20年（1887）頃（諸説あり）から始め、明治43年9月まで行っていました。



浅虫にある「篤行者米田甚吉翁」碑

この間、明治35年10月から約2年間、彼は野内村長も務めています。そして、浅虫製塩に関する新聞記事に目をやると、明治40年を過ぎた頃から、製塩場の持主を息子の千代吉と記しています。製塩事業は代替わりをしていることが見て取れます。

さて、この講座で参考とした資料のひとつに、大正2年（1913）刊行の『東奥人名録』があります。明治時代に活躍した人物を取り上げた冊子で、米田甚吉も出てきます。ここで注目したいのは、米田は野内村長を辞した後、北海道で材木商を営み、津軽りんごとともにウラジオストク方面への輸出をしたとある記述です。

特に、ウラジオストクとの貿易は見逃せません。ただ、残念なのはこれがいつの出来事なのか、さらにどこの港を通じて輸出したのかが分からないことです。後者は青森港ではないか…と考えてはいますが。

一方、青森港を舞台に展開した対ウラジオストク貿易は、後に青森市長を務めた北山一郎が設立した「青浦商会」を通じた活動が知られています。当時、北山は進んでウラジオストクとの貿易をしようとしな^{さきがけ}い青森の人々を嘆き、これを「要するに 魁 がない」（『北山一郎自叙伝』）と厳しく断じ、自ら乗り出したのです。



北山一郎
（青森県立青森盲啞学校『県立移管記念』、
昭和12年7月、歴史資料室蔵）

そして、本店を青森に、ウラジオストクに支店を構え、後には大連とハルビンに出張所を置きました。輸出品はりんごと雑貨、輸入品は農産加工品と毛皮とする方針とし、実際、青森港からのりんご輸出額は明治42年～大正3年までは順調に伸びていました。

ところが、この貿易は、第一次世界大戦・ロシア革命とそれに続く社会主義政府の誕生によって挫折を余儀なくされます。大正13年にはシベリアの政情は安定してきたものの、この年8月17日に開催された臨時株主総会で青浦商会の営業休止が決定します。そして、昭和3年もしくは翌昭和4年頃に解散したとみられています。

このような青森港を舞台とした対ウラジオストク貿易に米田甚吉も参加し、彼もまた北山とおなじく「魁」のひとりとなったのでしょうか。興味は尽きないところです。気長に資料を集めていきたいと思っています。